

Community Cinema / Exhibitor's
Network Meeting 2006 In Hokkaido

コミュニティシネマ/上映者
ネットワーク会議 2006 イン 北海道

2006年9月8日[金]~9日[土]、札幌市にて開催！

日程

会議：2006年9月8日[金]~9日[土] / 映画上映：9月9日[土]

会場

(同封の地図をご参照ください)

9月8日[金] 札幌プリンスホテル国際館パミール 3F 札幌市中央区南3条西12丁目
9月9日[土]

分科会1/午後のプログラム：北海道庁赤れんが庁舎2階1号会議室
札幌市北3条西6丁目

分科会2：北海道庁別館地下小会議室 札幌市3条西7丁目

映画上映：シアターキノ 狸小路6丁目

参加費

会議：2,000円 ※8日・9日共に参加可。一部のみの参加も同じ。

レセプション：3,000円

(映画上映には、入場整理券が必要です。)

主催：NPO 法人北海道コミュニティシネマ・札幌 / コミュニティシネマ支援センター/
財団法人国際文化交流推進協会(エース・ジャパン)

共催：北海道文化財団

支援：札幌市/文化庁

参加を希望される方は、別紙の申込用紙にご記入の上、
8月25日(金)までにファクシミリ (FAX.03-5562-4423)にてご送付ください。

(ご出席申し込みに対しては、折り返し確認書をお送り致します。)

問い合わせ

◇ コミュニティシネマ支援センター/エース・ジャパン
TEL | 03-5562-4422 FAX | 03-5562-4423
www.jc3.jp www.acejapan.or.jp

◇ NPO 法人北海道コミュニティシネマ・札幌(シアターキノ内)
TEL | 011-231-9355 FAX | 011-231-9356

**Community Cinema / Exhibitor's
Network Meeting 2006 In Hokkaido**
コミュニティシネマ/上映者ネットワーク会議 2006 イン 北海道

1976年、第1回湯布院映画祭開催——。

このとき、まだ多くの人は“ゆふいん”がどこにあるのか、映画祭がどんなものなのか、知りませんでした。それから30年、“ゆふいん”は日本でも有数の魅力的な温泉地として多くの観光客を集め、30回を数える湯布院映画祭に加えて、ゆふいん文化・記録映画祭、ゆふいん子ども映画祭といった新しい映画祭も生れています。

今年のネットワーク会議では、湯布院映画祭の創設者であり、**ゆふいんの町づくりの中心的存在であり続ける中谷健太郎氏**のお話を聞きます。ゆふいんで40年間にわたって行われてきた町づくりの中核にあるものは何なのか。**文化による町づくり、地域振興を再考し、その本質とは何かを考えます。**

そして、今年のテーマは、「デジタル時代の映画上映～上映することの意味を考える」

デジタルカメラ、デジタル通信、デジタル放送、デジタルシネマ・・・、デジタルを冠した言葉が増え、私たちの周りでは日々、様々な“デジタル化”が進みつつあります。

その最たるものが映像のデジタル化です。衛星放送やCS放送ではひっきりなしに映画が放映され、インターネットにアクセスするだけで世界中の様々な映像を大画面のテレビモニターで個人的に鑑賞することができる時代がきています。ロードショー公開からDVD発売までの期間はどんどん短くなり、映画館におけるフィルムからデジタルシネマへの転換がいつ、どのように進展するのか、「Xデイ」をめぐる、技術開発が進められ、様々なビジネスの世界を巻き込んだ虚虚実実の駆け引きが繰り広げられています。

もちろん、コミュニティシネマの活動もこういった動向と無縁であるわけではありません。

しかし、私たちは、“デジタル”とどう向き合えばよいのでしょうか。**デジタル化は映画の上映を簡便なものにし、上映活動の可能性を広げるのでしょうか。上映におけるデジタル化は巨額の設備投資を意味し、上映者に多大な犠牲を求めるものなのでしょうか。ネット配信等による個人試聴の可能性の拡大は上映の意味をどう変えていくのでしょうか。**

今回のネットワーク会議では、コミュニティシネマにとって、上映者にとって、“デジタル”は**一体どんな意味をもつか。いま考えるべきこと、必要なことは何なのか。** 現在、私たちの周りで起こっている“デジタル化”を総合的に考え、デジタル時代における上映の意味を考えます。

もうひとつのテーマ、子どもたちと映画

“映画教育”はコミュニティシネマにとって非常に重要なテーマであり、この会議では数年にわたり、継続的に“映画教育”を取り上げてきました。今年は特に、学校との関係に焦点を当てます。学校は子どもたちが最も多くの時間を費やしている場所です。学校の中に映画を届けることはできないのか。群馬と金沢での試みを中心に、**学校と映画の関係**を考えます。

札幌では、9月6日から、「Sapporo ショートフェスト2006」(第1回札幌短編映画祭)も開催されます。

9月の札幌は、1年でいちばんいい季節となります。皆様、初秋の札幌へお出かけください。

Community Cinema / Exhibitor's
Network Meeting 2006 In Hokkaido
コミュニティシネマ/上映者ネットワーク会議 2006 イン 北海道

プログラム

9月8日[金]

13:30 開会 主催者挨拶

コミュニティシネマ支援センター「活動報告」

13:50~14:50

基調講演 「ソコが、ココになる日」～由布院盆地は再生するか？

ゆふいん音楽祭、湯布院映画祭など様々なイベントや由布院駅ホールの立ち上げ、由布院グリーンツーリズム研究所の設立など、独創的な町づくりで注目を集めてきた湯布院町。2005年10月、町村合併により湯布院町は由布市に組み込まれることになりました。ゆふいんはこれからどうなるのか？常に湯布院町の町づくりの中心にいた中谷健太郎氏に、「ゆふいん」の町づくりの手法、思想、歴史、そして、“これから”を聞きます。

中谷 健太郎

1934年、北由布村生まれ。大学卒業後、東宝撮影所に入社。稲垣浩などの下で助監督を務める。1962年、父の死により帰郷。旅館亀の井別荘を継ぐ。ゆふいん音楽祭、牛喰い絶叫大会、湯布院映画祭、ゆふいん文化・記録映画祭などのイベントを次々と企画。湯布院町商工会長などを歴任。2001年5月まで、由布院温泉観光協会会長として活躍。ゆふいんグリーンツーリズム研究所を主宰。著書に『たすきがけの湯布院』、『湯布院幻燈譜』湯布院発、にっぽん村へ『由布院に吹く風』等。

15:00~18:30

プレゼンテーションとディスカッション 「デジタル時代の映画上映」

◇ プレゼンテーション 15:00~16:00

Sapporo ショートフェスト2006(第1回札幌国際短編映画祭)

2000年から札幌市では「ショートショート フィルムフェスティバル in 北海道」が行われ、多くの観客を集めてきた。2004年以降は海外の映画祭等と連携したプログラムや監督を交えたフォーラムなど独自のプログラムも実施。そして、今年、Sapporo ショートフェスト 2006が開催される。内外の短編映画のコンペティションはもちろん、国内のコンテンツ産業のマーケットや子ども向けのワークショップなども行われる。「札幌の街に世界中から才能溢れる若い映画監督が集い、ショートフィルムを通し、子供の未来を考え、街の活性化を行い、そしてまた、このフェスティバルが新しいムーブメントを創っていく」ことを目指している。

全州国際映画祭

2006年で7回目を迎えた「全州国際映画祭」は、釜山映画祭、プチョン国際ファンタスティック映画祭等と並ぶ韓国で最も重要な映画祭のひとつである。この映画祭がテーマとして掲げているのが“デジタル”と“インディペンデント”、新しいメディアとしてのデジタルに焦点を当てながら、内外のインディペンデント、アート映画を紹介する。新しい才能の発掘を目指すコンペティション部門の他、韓国インディペンデント映画や短編映画の特集、内外の監督のレトロスペクティブなど野心的で充実したプログラムが組まれている。また、毎年、アジアの3人の監督によるオムニバス映画「3人3色」を製作、これまでに日本から諏訪敦彦、青山真治、石井聰互、塚本晋也といった監督が参加している。プレゼンテーションを行うチョン・スワン氏は、本映画祭のプログラマーであり、日本映画の研究者でもある。

◇ ディスカッション 「デジタル時代の映画上映」 16:15~18:30

コミュニティシネマにとって、上映者にとって、“デジタル”は一体どんな意味をもつのか。

いま考えるべきこと、必要なことは何なのか。様々な立場で映像メディア、映画と関わるパネリストがデジタル時代における上映の意味を考えます。

司会:

内藤 篤 (弁護士、ニューヨーク州弁護士、慶応大学法科大学院講師/シネマヴェーラ渋谷館主)

映画・音楽・放送・出版・ゲーム等のエンターテインメントおよびメディア関連の法実務が専門。2006年1月渋谷に映画館「シネマヴェーラ渋谷」を開館。著書「ハリウッド・パワーゲーム/アメリカ映画産業の『法と経済』」(TBSブリタニカ)「走れ、エロス！」(筑摩書房)「エンターテインメント・ロイヤルの時代」(日経BP)「エンターテインメント契約法」(商事法務)等。訳書「エンターテインメント・ビジネス——その構造と経済」(リットーミュージック)「米国著作権法詳解」(信山社)他。

パネリスト:

チョン・スワン (全州国際映画祭プログラマー)

岡島 尚志 (東京国立近代美術館フィルムセンター主幹)

1979年から、フィルムセンターの上映・保存・調査・出版・国際交流事業、各種イベントの企画・運営に携わる。代表的なキュレーション番組に「ラオール・ウォルシュとその時代」(86)「知られざるアメリカ映画」(93)「日本映画の発見」(96~02)「ハード・ホークス映画祭」(99)「韓国映画—栄光の1960年代」(02)等。国際フィルム・アーカイヴ連盟(FIAF)運営委員(03~)。副会長(04~)。2005年より現職。

次頁へ続く

小川 直人 (せんだいメディアテーク学芸員)

2000年よりせんだいメディアテーク準備室および学芸員として勤務。主にスタジオシアターの企画を担当。蓮實重彦氏による連続講座「映画への不実なる誘い」、「ペドロ・コスタ 世界へのまなざし」といった企画や市民の実行委員会による「ショートピース！ 仙台短篇映画祭」を開催している。近年では映画教育プログラムも数多く手がけている。

武邑 光裕 (札幌市立大学教授/附属図書館長)

1954年生まれ。日本大学芸術学部芸術研究所修了。同大学芸術学部専任講師、京都造形芸術大学情報デザイン科助教授、東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授を経て、2006年4月より現職。専門はメディア美学、デジタルアーカイブ情報学など。京都、石川、沖縄など、日本各地の地域文化資産のデジタル映像化を推進する「デジタル・ジャパネスク」プロジェクトを展開。札幌市立大学では附属図書館長を兼任、デジタル映像コンテンツを配信する次世代図書館を目指している。

中江 裕司 (映画監督)

1960年、京都生まれ。琉球大学入学と共に沖縄へ移住。1992年、真喜屋力、當間早志と共に劇場用映画『パインアップル・ツアーズ』を製作。国内のみならず海外でも高い評価を得た。1994年『パイパティローマ』、1999年『ナビイの恋』、2002年『ホテル・ハイビスカス』を監督、沖縄県内の離島まで「出前上映」を行う。閉館した那覇市内の映画館「桜坂シネコン琉映」の建物、設備を借り受け、2005年7月、全く新しい劇場「桜坂劇場」をオープンした。

松本 正道 (アテネ・フランセ文化センター主任/コミュニティシネマ支援センター運営委員長)

1979年より現職。「古典映画の再評価と同時代作家の発見」をテーマに年間200本以上の世界の映画を上映。主な企画に「ダニエル・シュミット映画祭」「淀川長治映画塾」など。「書かれた顔」(ダニエル・シュミット監督)アソシエイト・プロデューサー。1997年には、ユーロスペースとともに映画美学校を開校。編著に「芸術経営学講座(映像編)」(東海大学出版会)など。

19:00~ レセプション

9月9日[土]

10:00~12:30

分科会

■ 分科会 1 : 映画教育について考える ~ 学校と映画の関係 ■

◇10:00~11:00 プレゼンテーション

「群馬県における映像教育~『眠る男』から映像教育へ」(仮題) 小栗康平(映画監督)
「金沢における映画教育~金森学級での授業について」 金沢コミュニティシネマ推進委員会

小栗 康平 (映画監督)

1945年群馬県生まれ。81年『泥の河』で監督デビュー。1990年、島尾敏雄の小説を映画化した『死の棘』はカンヌ映画祭でグランプリ・カンヌ1990を受賞。1996年、監督自身の初のオリジナル脚本による『眠る男』を発表、同作は群馬県という地方自治体が製作した映画としても大きな注目を集めた。2005年、9年ぶりに新作『埋もれ木』を発表。2004年度より群馬県でスタートした「映像教育」において、小学校教師向けの研修を行っている。

金沢コミュニティシネマ推進委員会

(小野寺 央子 / 土肥 悦子)

2003年に設立された「金沢コミュニティシネマ推進委員会」は、金沢コミュニティ映画祭、こども映画教室を開催、21世紀美術館シアター21で定期的に上映会「映画の極意シリーズ」を企画するなど、積極的に活動を展開してきた。今年3年目に入る「こども映画教室」ではスタッフの人材教育を目的として、小学校との連携プログラムをスタート、全国でいち早く「いのちの教育」や「死の授業」を実践してきた金沢の小学校教諭金森俊朗先生と共同で授業づくりを実践している。

◇11:00~12:30 ディスカッション

司会:

伊藤 隆介 (映像作家・北海道教育大学助教授)

1963年札幌市生まれ。東京造形大学で映像作家・かわなかのぶひろ氏に師事、実験映画の制作を始める。フィルムのメディアムとしての物質性、ビデオの伝達メディアとしての特性などをテーマにした映画やビデオ・インスタレーションを主に制作。米国ブラックマリア映画祭、イメージフォーラムフェスティバルで受賞。札幌のインディーズ映画上映館「まるバ会館」メインスタッフとしてインディペンデント映画の普及に努めるほか、子どもを対象としたアニメーションづくりのワークショップなども行っている。

武田 亘明 (北星学園大学短期大学部教授)

1958年札幌市生まれ。北海道教育大学大学院修了。高等学校・専修学校講師等を経て、1992年北星学園女子短期大学講師、1999年助教授、2006年から現職。教育情報学・教育工学専攻。インターネットなどの新しいメディアの教育や市民活動における効果的な活用方法、新しいメディアを活用した自己表現、コミュニケーション能力、コラボレーション能力の開発のための実践的教育を主たる研究テーマとして大学内に止まらない活動を展開している。

パネリスト:

小栗 康平

小野寺 央子 / 土肥 悦子

藤川 大祐 (千葉大学教育学部助教授)

メディアリテラシー、ディベート、環境、数学、アーティストとの連携授業、企業との連携授業等、様々な分野の新しい授業作りに取り組む。NPO法人企業教育研究会理事長、教育貢献活動推進協議会理事長、NPO法人全国教室ディベート連盟事務局長、千葉県メディアリテラシー教育推進機構理事長、NPO法人芸術家と子どもたち理事等をつとめる。

■ 分科会 2： デジタル上映とは何か～デジタルシネマの世界的動向から日々の上映まで ■

DCI(Digital Cinema Initiatives)スペックと世界の映画館におけるデジタル化の現状と動向を聞くとともに、日常的な上映活動のデジタル化に必要なことを具体的に考えます。

堀 三郎 (アテネ・フランセ文化センター)

アテネ・フランセ文化センターの製作担当チーフとして、SKIP シティ国際 D シネマ・映画祭、東京国際映画祭、TOKYO FILMEX 映画祭、釜山国際映画祭など多くの映画祭の製作業務に携わる。字幕投影装置(特許)の開発設計の仕事が高く評価され、1994 年度日本映画ペンクラブ奨励賞を受賞。兵庫県宝塚市の公設民営映画館シネビピアの基本設計や 2007 年にオープンする川崎市アートセンターの映像設計アドバイザーなど、各地に設立される映像関連施設の企画にも数多く関わっている。

柳 修逸 (㈱スキップシティ 事業企画運営部テクニカルマネージャー)

ソニーPCL(株)のポストプロダクションにおいて、放送番組、CM等のビデオ編集を経験した後、その経験を活かしソニーニア/リニア編集室、企業ミュージアム等の企画、AV システム及び内装デザインの総合プロデューサーを行う。ソニー(株)で CS 放送局のワークフローも含めた制作システムを立上げ、制作技術を統括する。その後、デジタルシネマの撮影・編集・上映のファシリティを有する埼玉県スキップシティにおいて7月に開催された“スキップシティ国際 D シネマ映画祭 2006”のポストプロから上映までの技術を統括する。

13:30~15:30

コミュニティシネマに関するプレゼンテーションとディスカッション

◇ プレゼンテーション「北海道におけるコミュニティシネマ活動」 13:30~14:30

司会：中島 洋

1970の北海道大学映研時代から、自主上映、自主製作活動を始め、北海道で映画を中心とする、様々な文化の「場」作りに関わり、1992～市民出資のNPO型映画館「シアターキノ」を設立。1998～2スクリーン体制のミニシアターになる。2000年より、映画講座や映画ワークショップを主催、その成果をもとに、2004～NPO法人北海道コミュニティシネマ・札幌を映画やまちづくり関係者と共に設立。NPO法人「北の映像ミュージアム」推進協議会理事。3大学の非常勤講師やこどもワークショップで映画教育の実践も始めている。

コミュニティシネマきたみ (シアターボイス)

北見市では、2000年にシネマコンプレックスが開館、中心市街地から映画館が消えた。東急百貨店内の「ホール109」も2001年に上映を中止した。このホールをもう一度、市民映画館(コミュニティシネマ)として復活し、多様な映画を上映し、地域の芸術・文化振興と中心市街地の活性化を図ろうということで、NPO法人コミュニティシネマきたみが設立され、2006年2月、東急百貨店の協力のもと「ホール109」は「シアターボイス」として復活した。

帯広コミュニティシネマ (CINE十勝)

廃業した映画館を借り受け、市民ボランティアが上映に関わるすべての業務に参加する手作りの「まちづくり活動」を行っている。映写教室、日本映画再発見シリーズの実施、観客が選んだ上位作品の上映など、市民と共に歩む活動を積極的に展開。2005年、道の北まちづくり奨励賞受賞。今年度より上映を平日にも拡大、帯広フィルムコミッションとも連携を取り、地元映画サークルの活動を積極的に応援している。

穂別町「田んぼでミュージカル」実行委員会

2002年北海道・穂別町の高齢者が中心となって、ミュージカル映画「田んぼdeミュージカル」を製作。脚本・音楽・衣裳・編集もすべて地元住民で行い、出演者125人の平均年齢は74歳。全国的に注目され、「地方の時代映像祭」部門奨励賞など多くの賞を受賞した。第2作「田んぼdeファッションショー」も好評を得ている。北海道の小さな町の愉快な映画づくりは、新しいコミュニティ文化を発信している。

ゆばり国際ファンタスティック映画祭

北海道夕張市にて毎年2月下旬に開催。1990年、「ふるさと創生資金」を基に町興し事業として開始。以来、メジャー作から自主映画まで娯楽作品を中心に上映。ゲストと観客の距離が近いことからアットホームな映画祭として認知されている。93年のコンペで入賞した Q.タランティノー監督が自作『KILL BILL vol.1』でGOGO ユウバリなる役を登場させるなど国際的な認知度も高い。同市の財政破綻により当面の休止が決定した。

◇ コミュニティシネマに関するフリーディスカッション 14:30~15:30

司会：茂木 正男 (NPO 法人たかさきコミュニティシネマ/シネマテークたかさき代表)

映 画 上 映

早川渉監督最新作「壁男」プレミア上映。

札幌で製作された早川渉監督の最新作。会議参加者のためのプレミア上映です！

「壁男」2006/35ミリ 98分

監督、脚本/早川渉 撮影/国松正義
出演/小野真弓、堺雅人、水戸ひねき

※9日(土)16:30~18:30頃の間シアターキノで上映予定ですが、時間の変更になる可能性があります。上映時間は、参加者に会議中にご案内いたします。

1999年のカンヌ映画祭に長篇第1作「7/25」が出品された早川渉監督の8年振りの新作。カルト的な漫画家、諸星大二郎原作の異色短篇を映画化。人間の恐怖心がどこからくるのか、人間も人間の内面も恐怖なのかもしれない現代を、東京ではなく、乾いた空気感の札幌で、ジャパンホラーの情緒性を排して作ろうとしている。札幌スタッフで、仕上げまでほとんどを札幌で行ったが、撮影は全国でも稀なHD非圧縮収録で行われ、35ミリに変換して上映。技術的な面でも注目を集めている。来年全国公開予定。

「コミュニティシネマ/上映者ネットワーク会議」は、

さまざまな場で“映画を見せること”を行っている人々の情報交換と研究討議の場として、1996年から毎年開催されているものです。主に映画祭関係者、公共ホール・美術館・図書館の映像担当者、自治体の文化事業担当者、シネクラブの主催者、ミニシアターを中心とした興行関係者、自主上映団体、独立系配給会社等々が集まります。映画に興味のある方ならどなたでも自由にご参加いただけます。